

カンタータ《悔悟するダヴィデ》K.469 のイタリア語歌詞への考察

—— 作詩者の特定およびミサの韻律との比較 ——

野口秀夫

1. はじめに

犬輔：カンタータ《悔悟するダヴィデ Davide penitente》K.469 は《ハ短調ミサ》K.427 に別の歌詞を付けたものだとされていますが、よく分からないことがあります。モーツァルトが以前の自作品に加えた変更は、主に楽器編成に関するもので、新しいアンサンブルのために新しい楽器が与えられたり（例：K.385）、丸ごと楽器編成が変えられたり（例：K.375→K.406）、オーケストラ曲がピアノ用に縮小されたり（例：K.509）、ピアノ曲がオーケストラ用に編曲されたり（例：K.25→K.32 No.17）しました。モーツァルトは実際に作品を「再献呈」することもしました（例：K.32）。オペラ序曲が交響曲として使用されたり（例：K.111→K.111 [K.120, K.111a]）、その逆が行われたり（例：K.45→K.51）、作品のモチーフ、テーマ、および完全なセクションが別の文脈で再利用または引用されたり（例：K.595→K.596）しました^{注1}。K.469 の場合、モーツァルトは何のために、声楽曲にどのような具体的手法を用いて作品を仕上げたのでしょうか。

鳥代：ヨハン・ゼバスティアーン・バッハにも世俗カンタータから教会カンタータへの転用、あるいは教会カンタータからミサへの転用がたくさんありますよ。歌詞の変更という点で参考になるのではないのでしょうか。

犬輔：そうですが、バッハの転用作品の場合は概して評価が高いのに、モーツァルトの K.469 は評価が低いようなのが疑問なんです。出来がよくないからなのでしょう。

鳥代：歌詞に関してはダ・ポンテの作という説もあるけど、不明ということらしいわね^{注2}。

犬輔：そのことも評価が低い一因になっているのかも知れない。

教授：歌詞に関しては諸君たちがお得意のネット検索で何らかの手掛かりを得ることができるであろう。だが、その前に K.469 の成立に至るまでの経緯を見ておこう。

2. 成立までの経緯^{注3}

犬輔：モーツァルト自身による経緯の説明は何もないので他の資料に頼るしかありません。

鳥代：1798 年にコンスタンツェ・モーツァルトから夫の遺品を整理するよう依頼され、モーツァルトの作品、特にヴィーン時代の作品の詳細に精通していたマクシミリアーン・シュタードラー神父による報告があります（角括弧内は修正あるいは補足です）。「ヴィーンの協会 [音楽芸術家協会 Tonkünstlersozietät] のメンバーは、1783 年 [正しくは 1785 年] に未亡人と孤児のためにモーツァルトにオラトリオ [むしろカンタータ] を依頼しました。しかし、新しいオラトリオ [カンタータ] を作曲するには時間が足りなかったため、モーツァルトは未完成のミサ曲を取り上げ、イタリアの作家によるテキストをその下敷きにし、いくつかのアリアとデュエットを追加して [デュエットは追加ではない]、いわゆるオラトリオ [カンタータ] 《悔い改めるダヴィデ Davidde penitente》が誕生しました。このオラトリオ [カンタータ] では、合唱はキリエとグローリアから取られ、フーガには 3 人の独唱の曲 [カデンツァ] が挿入されています。

教授：音楽芸術家協会は音楽家たちの未亡人や孤児のために 1771 年に設立された。ロンドンの同種の組織をモデルとして生まれたこの協会は、1772 年より、ケルトナートーア劇場で音楽会を開催したが、主にオラトリオを曲目としていた。モーツァルトは合計 4 回この協会のコンサートに登場している。そのうち 3 回はクラヴィア奏者としてであった。

犬輔：1 回目は成人したモーツァルトがヴィーンで初めて公の場に姿を現した時であり、協会はモーツァルトの協力を得るためにヴィーンに滞在していたコロレド大司教に働きかけなければならなかったといえます。プログラムは次のとおりでした。「1781.4.3 火曜日、ケルトナートーア近くの王室王室特典劇場で、音楽芸術協会のために『大音楽会』が催される。その最初にザルツブルク大司教の尊き慈悲に仕える騎士ヴォルフガング・アマデー・モーツァルトの作曲による交響曲 [K.297?あるいは K.338?] が演奏される。次にモーツァルト氏はピアノ・フォルテの独奏 [K.354?] をする。彼はまだ 7 歳の少年の頃当地にいたことがあるが、当時既に作曲に関する考え方だけでなく技巧一般、演奏の巧みさ、趣味の点で聴衆の大喝采を博していた」。協会の幹部がヴィーンでまだ成人としての実績のないモーツァルトを大司教の反対を説得してまで採用したとは驚きです。評判が伝わっていたということなのでしょう。



音楽芸術家協会の基本規則の草案

- 鳥代：2 回目は 1783.12.22 と 23 にブルク劇場で音楽芸術家協会の音楽会が開催され、プログラムには、アーダムベルガーが歌うモーツァルトの「新しいロンド」が含まれていました（ドイチュは、この作品は K. 431 であると推測しています）。第一夜のみ、プログラムにモーツァルトがソリストを務めるクラヴィーア協奏曲が 1 曲含まれていました。
- 教授：1785.2.11 にモーツァルトは音楽芸術協会に入会したいと請願する。この請願はしかし彼が洗礼証書を提出しなかったために、決裁されなかった。
- 犬輔：そして 3 回目が 1785.3.13 と 15 に音楽芸術家協会の音楽会がブルク劇場で開かれ、K.469 がカテリーナ・カヴァリエーリ、エリーザベト・ディストラーおよびヨハン・ヴァレンティーンアーダムベルガーを独唱者として演奏されました。
- 鳥代：4 回目は 1785.12.23 にブルク劇場における音楽芸術家協会の降臨節の第 2 演奏会で、カール・ディッターズ・フォン・ディッターズドルフのオラトリオ《エスター》の第 1 部と第 2 部の中間で、モーツァルトは 7 日前に完成したクラヴィーア協奏曲 変ホ長調 K.482 を演奏しています。
- 教授：さて、シュタードラー神父によれば K.469 は音楽芸術協会から依頼されたとある。どのように依頼されたのか調べなさい。
- 犬輔：音楽芸術協会の議事録 A 2/1785/1 によれば 1785 年の同協会の四旬節の年次夜会の準備中に、その年の初めに、ヴィンチェンツォ・リギーニのほか、モーツァルトも「新しい合唱と、できればレチタティーヴォを伴うアリアを準備する」ことが決定されたと書かれています。
- 鳥代：さらに、議事録 A 2/1785/5 に「プログラムは、ヨーゼフ・ハイドン氏の新しい交響曲ニ短調で始まり、すぐに同じハイドン氏による 2 番目の新しい合唱とそれに先立つマンディーニ氏のアリアが続き、その後再びヨーゼフ・ハイドン氏の交響曲が演奏される。その後、ボツァ氏とシェンカー氏が招待された協奏曲が演奏される。その後、モーツァルト氏の詩篇が演奏され、最後にヨーゼフ・ハイドン氏の交響曲が演奏される」とあります。
- 犬輔：議事録 A 2/1785/12 (1785.2.21 の議事) には「モーツァルト氏は約束していた詩篇を完成させることができなかつたので、代わりにヴィーンのためにまったく新しい別の詩篇を提案したが、それは音楽の約半分を占めるに過ぎない。したがって、アカデミーはさらなる準備を行う必要がある」とあり、結論として「ヨーゼフ・ハイドン氏の交響曲ニ短調で始まり、続いてサッキーニのホ長調の合唱。1 日目のアリアはマンディーニ氏。2 日目のアリアはル・ブラン夫人。交響曲はヨーゼフ・ハイドン。アリアと合唱は同氏、カヴァリエーリ夫人。協奏曲 1 日目はル・ブラン氏。2 日目はシェンカー氏。続いてモーツァルト氏による詩篇」とされています。
- 鳥代：「モーツァルトは約束していた詩篇を完成させることができなかつたので、ヴィーンのためにまったく新しい別の詩篇を提案した」という「別の詩篇」が K.469 に使われた歌詞になるのですね。これが当初の歌詞より短いのでプログラムの見直しが必要ということでしょう。結論として述べられているのはそのプログラムの代案なのでしょう。
- 犬輔：なぜモーツァルトは変更を申し出たのでしょうか。
- 教授：モーニカ・ホルは「モーツァルトは当初、音楽芸術協会から提案されたテキストを作曲するつもりだった可能性もある。しかし、その同じシーズンに彼がすでにコンサートや作曲に関して行っていた膨大な数の約束を考慮すると、どうやってそのような仕事を時間内に終わらせるつもりだったのかという疑問が生じる」と述べており、別の詩篇に変更された後も「1785.3.13 の演奏会までまだ 1 か月あった。しかし、時間は過ぎていくばかりだった。作品をまとめてテキストを下書きするだけでなく、少なくとも一度は楽譜に書き起こし、すべてのパート譜を準備する必要があった。このときモーツァルトは大きなプレッシャーを感じていた。2.11 から 3.18 までの間にメルグルーベで自ら企画した 6 回の演奏会のほか、3.10 にはブルク劇場で大成功を収めた夜会も開き、この夜会のために、演奏会のわずか 1 日前に最新のピアノ協奏曲ハ長調 K.467 を完成させていた。さらに、自ら企画していない演奏会にも少なくとも 3 回参加し、ゴットフリート・ヴァン・スヴィーテン男爵の邸宅での日曜午後の公演を訪れ、父親と弟子のヴァイオリニスト、ハインリヒ・マルシャンをもてなしていた。この頃、レオポルドはザンクト・ギルゲンの娘に宛てた手紙の中で、よく引用される次のような言葉を書いた。『毎日の夜会、常に学び、音楽、執筆など。[...] 夜会がようやく終わってくれたらと思う。このすべての煩わしさと混乱は言葉では言い表せないほどだ [...]』と続けている」と述べている。
- 鳥代：1785.3.13 と 15 の最終的な混成プログラムは、演奏会の報告によれば以下のとおりです。
「両夜のコンサートの第二部で、モーツァルトのカンタータが演奏されることになっていた。演奏の最初の部分は、どちらの場合も、ヨーゼフ・ハイドンの最新の交響曲 (Hob. I/80) ニ短調で始まり、続いてフローリアン・レーオポルト・ガスマンの《愛と精神》からの合唱と、ヨーゼフ・ハイドンが 1 年前に作曲し、後に《トビアの別れ》(Hob. XXI/1) に追

加して成功を収めた「嵐の合唱」が演奏された。第一夜のこれらの曲の間に、歌手のパオロ・ステファノ・マンディーニとフランツィスカ・ルブランがそれぞれ 1 曲ずつアリアを歌い、オーボエ奏者のルートヴィヒ・ルブランは休憩前の最後の曲としてオーボエ協奏曲を演奏した。第二夜のコンサートの第一部では、マンディーニのほかにかヴァリエリがイタリアのアリアを歌い、続いてイタリア合唱団とアントーニオ・サッキーニのアリアがヨハン・ヴァレンティーン・アーダムベルガーの独奏で続いた。第一部の終わりには、レーオポルト・モーツァルトの弟子ハインリヒ・マルシャンがヴァイオリン協奏曲を演奏した。モーニカ・ホルは当時ウィーンに来ていた父レーオポルト・モーツァルトが両方のコンサートの聴衆の中にいたと推測するのは妥当だろうと述べています。

教授：大事なことだが、前述の 1785.2.21 の議事録によれば当初の案は *Per la Batutta Sig: Salieri* と記され、サリエリがコンサートを指揮することになっていた。しかし、この名前が消され、「モーツァルト」と上書きされたのである。

3. テキストの出典^{註4}

犬輔：K.469 の歌詞をネットで検索してみましょう。あっ、簡単に出品がヒットしましたよ。サヴェリオ・マッテイの『聖書の詩篇集 *Libri poetici della Bibbia*』（1766 ナポリ初出）からの引用です。

鳥代：それは大発見ではないですか。今まで誰も指摘していないのでしょうか。

教授：残念ながら 2008 年に、イタリアの総目録 SBN (*Servizio bibliografico nazionale*) をオンライン調査することで、すでに発見されており、イレーネ・ブランデンブルク Irene Brandenbnurg (1966-) が 2010 年に論文を発表している。

鳥代：でもそのような情報は一般愛好家にはまだ伝わっていないのでしょうか。

教授：いや、英語の Wikipedia の *Davide penitente* のサイトや、楽譜、CD のライナーノートにはすべてマッテイのテキストであることが明記されている。言及がないのは日本語のサイトや日本語の文献のみだ。

犬輔：因みにケツヒェル 2024 を見てみましょう…。なるほど、サヴェリオ・マッテイのテキストで決定なんだ。

教授：『聖書の詩篇集』は解説付きの旧約聖書詩篇全編のイタリア語自由翻訳である。数ある版のうちどれがモーツァルトの音楽設定のテキスト・テンプレートとして使用されたのかを正確に特定することはできないが、1773 年の 6 巻あるいはその再版である 1779-1780 年の前半の 6 巻からの引用であろう。モーツァルトのテキストは、マッテイが訳した詩篇 4、6、7、33、67、96、99、119（ウルガタ訳の詩篇番号）からほぼ一語一句そのまま引用されている。

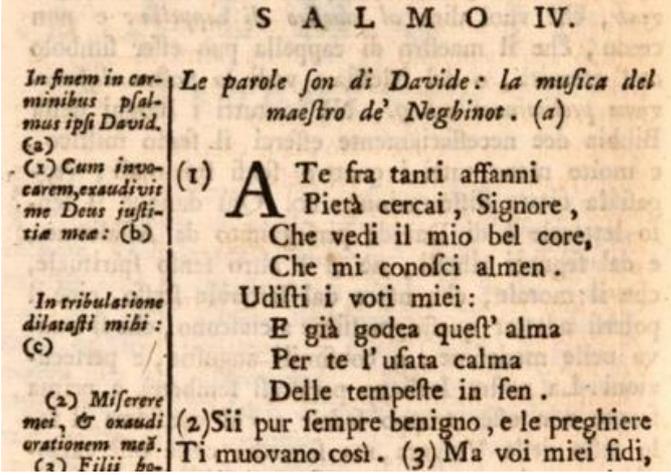
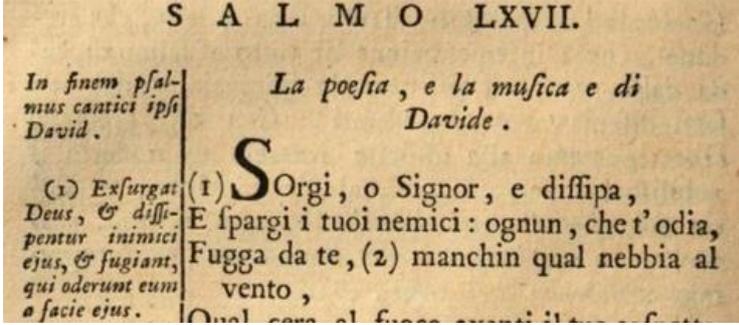
鳥代：マッテイの業績についてブランデンブルクの記述です。「ナポリの法学者、理論家、文学者であったサヴェリオ・マッテイ Saverio Mattei (1742-95) (右図) は、法律、哲学、神学、文学から専門的な音楽の話題まで、さまざまな主題について膨大な量の著作を残した。自らを“音楽の天才”と称したマッテイは、音楽と演劇に特に興味を持ち、メタスタージオとヨンメッリに関する著作がその好例である。マッテイはさらに、サン・カルロ劇場で国王の命名と誕生日を祝うカンタータなどの音楽作品のテキストを書き、手紙や出版物を通じてイタリアオペラの刷新に関する議論に頻繁に参加した。マッテイの最も重要な著作である『聖書の詩篇集』は、1766 年から 1774 年にナポリで初めて出版され、19 世紀後半までナポリやイタリア各地の出版社から何度も



版を重ね、多くの場合は増補された。モーツァルトの《悔悟するダヴィデ》が出版された 1785 年までに、この作品の 10 版がすでに出版されており、少なくともイタリアでは広く流通していたことを示している。版によって内容、巻数、印刷法、句読法が異なるが、詩篇の実際のテキスト、少なくともモーツァルトが《悔悟するダヴィデ》で使用したテキストは、すべての版で同一である。マッテイは、これらのテキストは音楽的な設定を念頭に置いて作成されたと述べており、メタスタージオの大ファンであるマッテイは、ウィーンの宮廷詩人の作品に明確な敬意を表して、『聖書の詩篇集』の中で、メタスタージオのオペラのテキスト、宗教的および世俗的なカンタータ、コンポニメンティなどに典型的な詩的形式と韻律パターンを採用している。マッテイのテキストはナポリとゆかりのある作曲家にとって特に興味深いものであった。ヨハン・アドルフ・ハッセ、ジャコモ・インサギーネ、ニコロ・ヨンメッリ、ジョヴァンニ・バッティスタ・マルティーニ、ジョヴァンニ・パイジエッロ、ニコロ・ピッチンニ、サルヴァトーレ・ルスポリ、マルコ・サントウッチなどの作曲家による多数の音楽作品がその証拠である。

大輔：では K.469 の各ナンバーの歌詞とその出典を対応させましょう^{注5}。

Mozart K.469	マッテイ『聖書の詩篇集』
N° 1 Coro	Salmo 119
Alzai le flebili voci al Signor, alzai le flebili voci a Dio, da mali oppresso.	Alzai le flebili mie voci a Dio, Da' mali oppresso: [...] 悪に抑圧されながら、私は神にか弱い声を上げた…
私は主にか弱い声を上げました。 悪に抑圧されながら、 神にか弱い声を上げました。	ウルガタ訳 Psalm 119、新共同訳 詩篇 120 : 1 Ad Dominum cum tribularer, clamavi: [...] 【都に上る歌。】 苦難の中から主を呼ぶと [...]
<p>S A L M O CXIX.</p> <p>PRIMO GRADUALE</p> <p><i>Il giusto annojato di più stare in una Città corrotta.</i></p> <p>(1) Alzai le flebili mie voci a Dio, Da' mali oppresso: nè dall' Empireo Sdegnò d' accogliere quel pianto mio.</p> <p>(1) Ad Dominum cum tribularer, clamavi: et exaudivit me.</p>	
N° 2 Coro	Salmo 33
Cantiam le glorie, cantiam le lodi, e replichamole in cento e cento modi, e replichamo le lodi, le glorie, cantiamo del Signore amabilissimo.	Cantiam le glorie, cantiam le lodi Del mio Signore amabilissimo E replichamole in cento modi. 栄光を歌おう。 私の最も愛すべき主を讃える歌を歌おう。 そしてそれを百通りの方法で繰り返そう。
栄光を歌い、 賛美を歌い、 それを百通りの方法で 繰り返しましょう。 賛美と栄光を繰り返し、 最も愛すべき主について歌いましょう。	ウルガタ訳 Psalm 33、新共同訳 詩篇 34 : 2 Benedicam Dominum in omni tempore: semper laus ejus in ore meo. 【ダヴィデの詩。ダヴィデがアビメレクの前で狂気の人を装い、追放されたときに。】 どのようなときも、わたしは主をたたえ わたしの口は絶えることなく賛美を歌う。
<p>S A L M O XXXIIL.</p> <p><i>Composto da Davide poichè scappò dalla corte del Re Achis, ove si finse pazzo.</i></p> <p>(1) Benedicam Dominum in omni tempore: semper laus ejus in ore meo.</p> <p>(1) Cantiam le glorie, cantiam le lodi Del mio Signore amabilissimo E replichamole in cento modi.</p> <p>(2) I giusti godano, e i pregi suoi</p>	
N° 3 Aria	Salmo 99
Lungi le cure ingrater, ah! respirate omai. S'è palpitato assai, è tempo da goder.	Lungi le cure ingrater, Ah! respirate omai: S'è palpitato assai, È tempo di goder. 恩知らずの心配から遠く離れて、ああ！今呼吸しましょう。とても悲しかった。楽しみ的时候了。
恩知らずの心配事は遠くへ、 ああ！今、呼吸しましょう。 震えおののきました。 楽しむべきときです。	ウルガタ訳 Psalm 99、新共同訳 詩篇 100 : 1 Jubilate Domino omnis terra, servite domino in laetitia. 【賛歌。感謝のために。】 全地よ、主に向かって喜びの叫びをあげよ。
<p>S A L M O XCIX.</p> <p><i>L'uomo contento quando è in grazia di Dio.</i></p> <p>(1) Ughi le cure ingrater, Ah! respirate omai: S'è palpitato assai, E' tempo di goder.</p> <p>(1) Jubilate Deo omnis terra, servite Domino in laetitia.</p>	

Mozart K.469	マッテイ『聖書の詩篇集』
N° 4 Coro	Salmo 4
Sii pur sempre benigno, o Dio, e le preghiere ti muovano a pietà.	Sii pur sempre benigno, e le preghiere Ti muovano così. いつも優しく、祈りを捧げましょう 彼らはあなたをこのように動かします。
神よ、常に優しくあれ。 そして祈りがあなたに同情の気持ちをもたらしますように。	ウルガタ訳 Psalm 4、新共同訳 詩篇 4 : 2 Miserere mei, et exaudi orationem meam. 【指揮者によって。伴奏付き。賛歌。ダヴィデの詩。】 憐れんで、祈りを聞いてください。
 <p style="text-align: center;">S A L M O IV.</p> <p style="text-align: center;"><i>Le parole son di Davide: la musica del maestro de' Neghinot. (a)</i></p> <p style="text-align: center;">(1) A Te fra tanti affanni Pietà cercai, Signore, Che vedi il mio bel core, Che mi conosci almen. Udisti i voti miei: E già godea quest' alma Per te l' ufata calma Delle tempeste in sen. (2) Sii pur sempre benigno, e le preghiere Ti muovano così. (3) Ma voi miei fidi,</p>	
N° 5 Duetto	Salmo 67
Sorgi, o Signore, e spargi i tuoi nemici, sorgi, o Signore, e dissipa i tuoi nemici. Fuga ognun che t'odia, fuga da te.	Sorgi, o Signor, e dissipa, E spargi i tuoi nemici: ognun, che t'odia, Fugga da te, [...] 主よ、立ち上がって、あなたの敵を追い払って下さい。 あなたを憎む者は皆、あなたから逃げ去って下さい。
主よ、立ち上がって、あなたの敵を散らしてください。 主よ、立ち上がって、あなたの敵を追い払ってください。 あなたを憎む者すべて、あなたから逃げなさい。	ウルガタ訳 Psalm 67、新共同訳 詩篇 68 : 1 Exsurgat Deus, & dissipentur inimici ejus, [...] 【指揮者によって。ダヴィデの詩。賛歌。歌。】 神は立ち上がり、敵を散らされる。
 <p style="text-align: center;">S A L M O LXVII.</p> <p style="text-align: center;"><i>La poesia, e la musica e di Davide.</i></p> <p style="text-align: center;">(1) SOrgi, o Signor, e dissipa, E spargi i tuoi nemici: ognun, che t'odia, Fugga da te, (2) manchin qual nebbia al vento, Quel core, al furore, evanti il tuo furore.</p>	
N° 6 Aria	Salmo 4
A te, fra tanti affanni, pietà cercai o Signore, che vedi il mio bel core, che mi conosci almen. Udisti i voti miei: e già godea quest' alma per te l' usata calma delle tempeste in sen.	A te fra tanti affanni Pietà cercai, Signore, Che vedi il mio bel core, Che mi conosci almen. Udisti i voti miei: E già godea quest' alma Per te l' usata calma Delle tempeste in sen.
多くの困難のさなかで、 私の美しい心を見てくださり、 少なくとも私を知ってくださる主よ、 私はあなたに慈悲を願いました。 あなたは私の祈りを聞いてくださいました。 そして、この魂はあなたのために、 いつものように胸に嵐の中の静けさを すでに享受しています。	ウルガタ訳 Psalm 4、新共同訳 詩篇 4 : 1 Cum invocarem, exaudivit me Deus justitiae meae: 【指揮者によって。伴奏付き。賛歌。ダヴィデの詩。】 呼び求めるわたしに答えてください わたしの正しさを認めてくださる神よ。
N° 4 Coro の SALMO IV. を参照。	

Mozart K.469	マッテイ『聖書の詩篇集』
N° 7 Coro	Salmo 6
Se vuoi, puniscimi, ma pria, Signore, lascia che almeno sfoghi, che almeno pria si moderi, il tuo sdegno, il tuo furore. Vedi la mia pallida guancia inferma, ah vedi la mia pallida guancia, Signore, deh sanami, deh porgi soccorso, aita, Signor, tu puoi, deh porgimi soccorso, deh sanami, porgimi aita.	Se vuoi, puniscimi, ma pria, Signore, Lascia che sfoghi, che almen si moderi Il tuo terribile sdegno, e furore. Vedi la pallida, la scolorita Mia guancia inferma? Signor, deh sanami, Tu puoi: tu porgimi soccorso, aita. [...]
あなたが望むなら私を罰してください、 しかしまず、主よ、 少なくとも私にあなたの憤り、 あなたの激怒を 吐き出させてください、 私の青白い、病んだ頬を見てください、 ああ主よ、私の青白い頬を見てください、 どうか私を癒し、助けてください、 主よ、私を助けてください、 ああ、どうか私を癒し、助けてください。	ウルガタ訳 Psalm 6、新共同訳 詩篇 6 : 1 Domine, ne in furore tuo arguas me, neque in ira tua corripas me. Miserere mei, Domine, quoniam infirmus sum, sana me, Domine, quoniam conturbata sunt ossa mea. 【指揮者によって。伴奏付き。第八調。賛歌。ダヴィデの詩。】 主よ、怒ってわたしを責めないでください、憤って懲らしめないでください。 主よ、憐れんでください、わたしは嘆き悲しんでいます。主よ、癒してください、わたしの骨は恐れています。
<p>S A L M O VI. <i>Preghiera nelle malattie.</i></p> <p>(1) SE vuoi, puniscimi, ma pria, Signore, Lascia, che sfoghi, che almen si moderi Il tuo terribile sdegno, e furore. (2) Vedi la pallida, la scolorita Mia guancia inferma? Signor, deh sanami, Tu puoi: tu porgimi soccorso, aita.</p>	
<p>(1) <i>Domine, ne in furore tuo arguas me, neque in ira tua corripas me.</i> (2) <i>Miserere mei, Domine, quoniam infirmus sum, sana me, Domine, quoniam conturbata sunt ossa mea.</i> (3) <i>Et anima mea</i></p>	
N° 8 Aria	Salmo 96
Tra l'oscure ombre funeste, splende al giusto il ciel sereno, serba ancor nelle tempeste la sua pace un fido cor. Alme belle, ah sì godete! né alcun fia che turbi audace, quella gioia e quella pace, di cui solo è Dio l'autor.	Tra l'oscure ombre funeste Splende al giusto il ciel sereno, Serba ancor nelle tempeste La sua pace un fido cor. Alme belle, ah! sì, godete, Né alcun fia che turbi audace Quella gioja, e quella pace, Di cui solo è Dio l'autor.
暗く陰鬱な影の中で、 穏やかな空は正義の人のために輝き、 誠実な心は嵐の中でも 平穏を保ちます。 美しい魂たちよ、ああ、楽しんでください！ また、神のみが創造する 喜びと平和を、 誰も大胆に乱すべきではありません。	ウルガタ訳 Psalm 96、新共同訳 詩篇 97 : 11-12 Lux orta est justo, et rectis corde laetitia. Laetamini, justis, in Domino, et confitemini memoriae sanctificationis ejus. 神に従う人のためには光を、心のまっすぐな人のためには喜びを種蒔いてくださる。 神に従う人よ、主にあつて喜び祝え。聖なる御名に感謝をささげよ。
<p>S A L M O XCVI. <i>Il Regno del Messia.</i></p> <p>(12) Tra l'oscure ombre funeste Splende al giusto il ciel sereno, Serba ancor nelle tempeste La sua pace un fido cor. (13) Alme belle, ah! sì godete, Né alcun fia, che turbi audace Quella gioja, e quella pace, Di cui solo è Dio l'autor.</p>	
<p>(12) <i>Lux orta est justo: et rectis corde laetitia.</i> (13) <i>Laetamini justis in Domino: et confitemini memoriae sanctificationis ejus.</i></p>	

Mozart K.469	マッテイ『聖書の詩篇集』
N° 9 Terzetto	Salmo 7
Tutte le mie speranze ho riposte in te. Salvami, o Dio, dal nemico feroce che m'insegue e che m'incalza.	Signor, le mie speranze Tutte ho riposte in te. Salvami, o Dio, Dal nemico feroce, Che m'insegue, e m'incalza.
私はあなたにすべての希望を託しています。 神よ、私を追い詰め迫る猛々しい敵から 私を救ってください。	ウルガタ訳 Psalm 7、新共同訳 詩篇 7 : 1 Domine Deus meus, in te speravi, saluum me fac ex omnibus persequentibus me, et libera me. 【シガヨン。ダヴィデの詩。ベニヤミン人クシュのことにつ いてダヴィデが主に向かって歌ったもの。】 わたしの神、主よ、あなたを避けどころとします。 わたしを助け、追い迫る者から救ってください。
<p>S A L M O VII.</p> <p>La confidenza ne' pericoli.</p> <p>I.</p> <p>(1) Domine Deus meus, in te speravi, saluum me fac: ex omnibus persequentibus me, et libera me.</p> <p>(1) Signor, le mie speranze Tutte ho riposte in te. Salvami, o Dio, Dal nemico feroce, Che m' insegue, e m' incalza. (2) Ah, mai non fia Che contro a me s' avventi</p>	
N° 10 Coro	Salmo 33
Chi in Dio sol spera: Di tai pericoli non ha timor.	Di tai pericoli non ha timore, Chi in Dio sol spera. [...]
神のみに希望を抱く者は そのような危難を恐れることはありません。	ウルガタ訳 Psalm 33、新共同訳 詩篇 34 : 22 Redimet Dominus animas servorum suorum, et non delinquent omnes qui sperant in eo. 【ダヴィデの詩。ダヴィデがアビメレクの前で狂気の人を 装い、追放されたときに。】 主はその僕の魂を贖ってください。 主を避けどころとする人は 罪に定められることがない。
<p>S A L M O XXXIII.</p> <p>Chi fida in Dio è contento.</p> <p>(2) Redimet Dominus animas servorum suorum, et non delinquent omnes qui sperant in eo.</p> <p>(2) Di tai pericoli non ha timore. Chi in Dio sol spera. Dalle miserie I giusti libera sempre il Signore.</p> <p>SAL-</p>	

マッテイ『聖書の詩篇集』の主文（イタリア語）には対応するウルガタ訳の詩篇（ラテン語）が併記されていますので、その邦訳を新共同訳から引用しました（但しダヴィデとあるのはダヴィデに統一しました）。日本語の聖書は主にヘブライ語で書かれた原典から訳されていますので、ところどころ詩篇番号がずれています。

鳥代：ウルガタ訳の詩篇のところどころに「ダヴィデの詩」と書いてありますが、どういうことでしょうか。

教授：ダヴィデに献呈された詩と考える研究者が多い。法的作品はモーセ、知恵的作品はソロモン、音楽と歌はダヴィデに帰することによる権威付けの意義も考えられる^{注6}。

犬輔：《悔悟するダヴィデ》というタイトルはどういう意味なのでしょう。

教授：ダヴィデが罪を悔い改め、神に許しを乞う物語を扱っている。モーニカ・ホルによる同類作品の説明はこうだ。「このタイトルに準ずる 1800 年以前のイタリア語の台本は 10 冊確認されている。モーツァルトが使ったタイトルは伝わっていない。モーツァルトは作品目録の中で、この曲のために書かれた新しいアリアについて、「協会の音楽のために」という注釈のみを付記している。当時のコンサートの広告では、「この時代にふさわしいまったく新しいカンタータ」と予告されている。18 世紀末の現存する音楽資料では、この作品は *Il Davide penitente* または *Davide penitente* と呼ばれている。コンスタンツェと息子のヴォルフガング・モーツァルトも書簡の中で *Davide penitente* について語っている。一方 1805 年に出版された印刷譜で、*Davidde penitente* という綴りが初めて登場し、こ

の綴りが流通し、マクシミリアーン・シュタードラーやノヴェット夫妻などの 19 世紀初頭の学者によって採用された。ケッヘル目録初版および旧モーツァルト全集によって、この題名が定着し、今日でも使用されている。イタリア語では *Davidde* と *Davide* の綴りはどちらも可能であるが、モーツァルトの時代の資料でも知られている、より一般的な正書法では *Davide* である」。

鳥代：ダヴィデの罪とは何なのでしょう^{注7}。

教授：神に選ばれ、愛され、イスラエルの王となったダヴィデ、常に神に導かれ、また神に寄り頼んで歩んだダヴィデが犯した罪は旧約聖書サムエル記下第 11 章下に書かれている。

鳥代：ダヴィデが屋上にいた時、沐浴しているウリヤの妻バト・シェバが目に入り、彼女を王宮に呼び、彼女と床を共にしてしまいます。それだけではありません。彼女が身ごもったことを知ったダヴィデは戦争の最前線で戦っているウリヤを呼び寄せ、なんとか彼女と関係を持たそうとします。しかし忠誠を尽くすウリヤは「神の箱も、イスラエルもユダも仮小屋に宿り、わたしの主人ヨアブも主君の家臣たちも野営していますのに、わたしだけが家に帰って飲み食いたり、妻と床を共にしたりできるでしょうか。あなたは確かに生きておられます。わたしには、そのようなことはできません」と言って応じません。ついにダヴィデはウリヤを激戦地に送り、味方の軍勢を一気に引いてウリヤだけを残り、敵にウリヤを殺させてしまったのです。ウリヤの妻は夫ウリヤが死んだと聞くと、夫のために嘆きました。喪が明けると、ダヴィデは人をやって彼女を王宮に引き取り、妻にしました。彼女は男の子を産みましたが、ダヴィデのしたことは主の御心に適いませんでした。

犬輔：姦淫、隠蔽、殺人の罪を犯したんですね。それも「まさかあの人が」という出来事です。そのことによって私たちに、私たちが陥れようとしている罪の力が、神を信じて生きている人をも捕えていく、いかに恐ろしいものであるかを教えているのだという説明もされます。

鳥代：サムエル記下第 12 章下は「主はナタンをダヴィデのもとに遣わされた」で始まります。予言者ナタンに叱責されたダヴィデが「わたしは主に罪を犯した」と言うと、ナタンは「その主があなたの罪を取り除かれる。あなたは死の罰を免れる。しかし、このようなことをして主を甚だしく軽んじたのだから、生まれてくるあなたの子は必ず死ぬ」と告げます。

犬輔：その子は亡くなりますが、バト・シェバがダヴィデの正式の妻となつてからの子を聖書は「ダヴィデはウリヤの妻によってソロモンをもうけ」と書いており、主イエスの系図は、ダヴィデの罪を見つめると共に、主イエスはその罪の赦しのためにこの世に生まれて来たことを語り示しているといえます。

鳥代：ダヴィデの改悛が述べられているのはどこでしょう。

教授：詩篇 51 (ウルガタ訳では Psalm 50) に「ダヴィデがバト・シェバと通じたので預言者ナタンがダヴィデのもとに来たときのダヴィデの詩」として次のように歌われている。「神よ、わたしを憐れんでください／慈しみをもって。／深い御憐れみをもって／背きの罪をぬぐってください。／わたしの咎をことごとく洗い／罪から清めてください。／あなたに背いたことをわたしは知っています。／わたしの罪は常にわたしの前に置かれています。／あなたに、あなたのみにはわたしは罪を犯し／御目に悪事と見られることをしました。／あなたの言われることは正しく／あなたの裁きに誤りはありません…」

犬輔：あっ、これはアレグリ「ミゼレーレ」の歌詞ですよ。

鳥代：でも、この詩篇は《悔悟するダヴィデ》の歌詞には使われなかったということですね。

4. コントラファクトゥールとは

犬輔：モーニカ・ホルによれば「合唱作品《悔悟するダヴィデ》は、今日ではカンタータに分類され^{注8}、3つの独唱曲(ソプラノの2曲とテノールの1曲)と4、5、8部合唱、大オーケストラのためのもので、モーツァルトがミサ曲ハ短調 K.427 のキリエとグローリアの音楽のために依頼した[歌詞の作者が判明したので「選定した」とすべき]イタリア語の詩のコントラファクトゥールの結果であり、2つの新しいイタリアのアリア(テノールと第1ソプラノ用)と、最後の合唱に追加された3つの独唱用のカデンツァからなる」とされています。ここでコントラファクトゥールとは何でしょう。

教授：声楽において、コントラファクトゥール *Kontrafaktur* は、音楽的な要素に変更を加えず、歌詞を変更することである。多くの場合、世俗音楽をキリスト教会の教会音楽として用いるために歌詞を付与することを指すことが多い。

犬輔：要するに替え歌のことですね。

鳥代：ヨハン・ゼバスティアーン・バッハのカンタータが例に挙げられますが、バッハの場合はよくパロディとも言っています。どう違うのでしょうか。

教授：同じことだと捉えていいだろう。木村佐千子の論文からバッハ研究の一端を紹介しておこう^{註9}。「音楽上のパロディの定義は、音楽事典によってまちまちである。たとえば、ドイツ語のハンディな音楽辞典を日本語に訳した『図解音楽辞典』では、“パロディ Parodie” と“替え歌 Kontrafaktur” の語を区別して用いており、“替え歌”は歌詞のつけかえ、“パロディ”は世俗曲を宗教音楽に転用することと説明されている。ドイツ語による最も規模の大きい音楽事典 *Die Musik in Geschichte und Gegenwart* (MGG) では、“パロディと替え歌 Parodie und Kontrafaktur” というかたちでまとめて項目が立てられている。“替え歌”という語は“多声楽曲に新たな歌詞をつけること、歌の旋律は変更せず歌の歌詞のみをかえること”の意味で、“パロディ”は“音楽芸術作品を、その本質を保ちつつ、歌詞をかえるだけでなく音楽的にも改作すること”の意味で用いられている。しかし、バッハと近い時代のドイツの音楽事典にたちかえてみるなら、たとえば、コッホ Heinrich Christoph Koch (1749-1816) の音楽事典 (1802 年) では、“既存の声楽曲に別の歌詞が作られ、その音楽につけられるなら、この新たな歌詞に基づく音楽をパロディと呼ぶ”と記されている。『ニューグローヴ世界音楽大事典』は、バッハの事例についてパロディの語を用いることに否定的であるが、これまでのバッハに関する研究文献では、パロディの語を用いて説明が行われていることが圧倒的に多い。

犬輔：同じ論文からバッハのパロディの代表例をまとめておきましょう。

表 1 バッハのパロディ代表例

パロディ	歌詞	音楽
世俗カンタータ BWV 30a から 教会カンタータ BWV 30 へ	ともに詩脚はトロヘウス格、行ごとのシラブル数も同じ	原曲の音楽をほぼそのまま
世俗カンタータ BWV 208 から 教会カンタータ BWV 68 へ	行数やシラブル数、詩脚、押韻などの構造がまったく異なる	音楽形式が異なる部分、追加作曲部分があり
管弦楽組曲 BWV 1069 から 教会カンタータ BWV 110 へ	緩急緩の中央にある急速なフーガ部分のみに合唱を組み込んだ	フーガの主題に歌がリズムを少し変えて重なる。2小節拡大している
教会カンタータ BWV 46 から 口短調ミサ BWV 232 へ	ドイツ語からラテン語へ。普遍性の追求？	転用にあたって多くの変更が加えられた

教授：世俗音楽から宗教音楽へのパロディは、宗教曲にすることで教会の礼拝で繰り返し演奏できるものとしたのだ、あるいは、作品を“高めた”のだなどという説明もよくなされる。

鳥代：モーツァルトの K.469 の場合はラテン語からイタリア語へ、ミサから教会カンタータへのコントラファクトゥール (替え歌) ですから、バッハには例がないのですね。

5. K.427 と K.469 の比較

犬輔：では K.427 と K.469 を比較しましょう。歌詞の対応です。

表 2 K.427 と K.469 の歌詞

K.427		K.469
Ky-ri-e e-le-i-son. Chris-te e-le-i-son. Ky-ri-e e-le-i-son.	N° 1 Coro Coro e Soprano I	Al-zai le fle-bi-li vo-ci al Si-gnor da' ma-li op-pres-so
Glo-ri-a in ex-cel-sis De-o. Et in ter-ra pax ho-mi-ni-bus bo-nae vo-lun-ta-tis.	N° 2 Coro Coro	Can-ti-am(o) le glo-rie, can-ti-am le lo-di(e) del Si-gno-re a-ma-bi-lis-si-mo e re-pli-chia-mo le in cen-to e cen-to mo-di.
Lau-da-mus te. Be-ne-di-ci-mus te. Ado-ra-mus te. Glo-ri-fi-ca-mus te.	N° 3 Aria Soprano II	Lun-gi le cu-re in-gra-te, ah! Res-pi-ra-te o-ma-i: s'è pal-pi-ta-to as-sa-i, è tem-po da go-der.
Gra-ti-as a-gi-mus ti-bi prop-ter ma-gnam glo-ri-am tu-am.	N° 4 Coro Coro	Si-i pur sem-pre be-ni-gno, o Dio, e le pre-ghi-e-re ti muo-va-no a pie-tà.
Do-mi-ne De-us, Rex cae-les-tis, De-us Pa-ter om-ni-po-tens. Do-mi-ne Fi-li u-ni-ge-ni-te, Je-su Chris-te. Do-mi-ne De-us, A-gnus De-i, Fi-li-us pa-tris.	N° 5 Duetto Soprani I e II	Sor-gi, o Si-gno-re, e spar-gi i tuo-i ne-mi-ci. Fug-ga o-gnun che t'o-di-a, fug-ga da te.
	N° 6 Aria Tenore	A te fra tan-ti^af-fan-ni pie-tà cer-cai, Si-gno-re, che ve-di^il mio bel co-re, che mi co-no-sci^al-men. (7音節詩行で 統一されている) U-di-sti^i vo-ti mie-i, e già go-de-a que-st'al-ma per te l'u-sa-ta cal-ma del-le tem-pe-ste^in sen.

K.427		K.469
Qui tol-lis pec-ca-ta mun-di, mi-se-re-re no-bis. Qui tol-lis pec-ca-ta mun-di, su-sci-pe de-pre-ca-ti-o-nem nos-tram. Qui se-des ad dex-ter-am Pa-tris, mi-se-re-re no-bis.	N° 7 Coro Cori I e II	Se vuo-i, pu-ni-sci-mi, ma pri-a, Si-gno-re, la-scia che al-me-no sfo-ghi, che si mo-de-ri il tuo sde-gno, il tuo fu-ro-re. Ve-di la mi-a pal-li-da guan-cia in-fer-ma? Si-gno-re, deh sa-na-mi, deh por-gi-mi soc-cor-so, ai-ta.
	N° 8 Aria Soprano I	Tra l'o-scu-re om-bre fu-ne-ste splen-de^al giu-sto il ciel se-re-no, ser-ba^an-cor nel-le tem-pe-ste la sua pa-ce^un fi-do cor. (9 音節詩行、 8 音節詩行) Al-me bel-le, ah! sì, go-de-te, né^al-cun fia che tur-bi^au-da-ce quel-la gio-ia e quel-la pa-ce di cui so-l^è Dio l'au-tor.
Quo-ni-am tu so-lus Sanc-tus, tu so-lus do-mi-nus. Tu so-lus al-tis-si-mus.	N° 9 Terzetto Soprani I, II e Tenore	Tut-te le mi-e spe-ran-ze ho tut-te ri-pos-te in te. Sal-va-mi, o Dio, dal ne-mi-co fe-ro-ce che m'in-se-gue e che m'in-cal-za.
Je-su Chris-te. Cum San-cto spi-ri-tu, in glo-ri-a de-i Pa-tris.	N° 10 Coro Coro e Soli	Chi in Dio sol spe-ra, di ta-i pe-ri-co-li non ha ti-mor.

音節をハイフンで区切りました。^は語間の音節結合です。太字は文法上のアクセントがある音節としました。Chris-teなどは楽譜ではChri-steと分綴（ぶんでつ）されます。

鳥代：第 6 曲と第 8 曲に選ばれた詩はイタリア語詩歌としての音節規則、脚韻規則が守られているので、コンサートアリアと同様の作曲法を採ることができたものと思われます。

犬輔：一方、その他のナンバーの歌詞は、韻文ではあるものの、引用が短いため音節数の統一性がくみ取れず、脚韻も判定できません。重唱曲であることから声部間で同じ歌詞が遅れて歌われることによる疑似押韻が代用すると考えることも出来そうです。

教授：そもそも、ラテン語のミサ通常文も韻文ではあるが、ラテン語詩の規則は踏んでいない。その点からミサ曲も《悔悟するダヴィデ》もほとんどの部分が音律的には緩く構成されていると言えるのではないか。一般論では分かりにくいので、個々の例で議論していこう。

鳥代：では、第 1 曲を見てみましょう。K.427 の冒頭、ラテン語では Kyrie の長音節の Ky にアクセントが来るように作曲されていますが、K.469 の Alzai の Al はアクセントのある音節ではありません。ただ、歌い方で第 2 音節 zai にアクセントを置くことはできるかと思われます。さらに、小節 9-10 は歌詞のアクセントに合わせてフレーズが変更になっています。これはモーツァルトが歌い方で歌詞の辻褄を合わせるようにと明確に指示しているわけです（以下上段は K.427 下段は K.469 のそれぞれソプラノ声部です）。



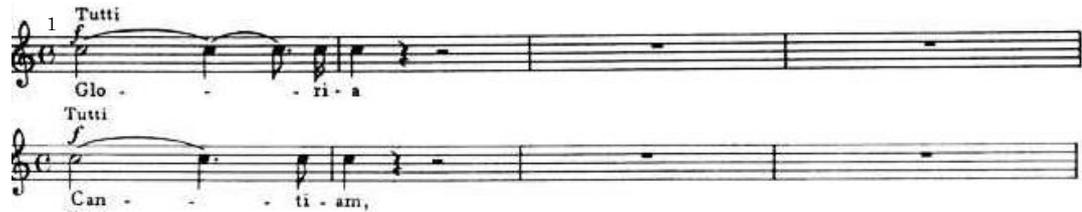
犬輔：アクセントの問題は、小節 27 では逆になっており、K.427 がアクセントと不一致で、K.469 が合致しています。



鳥代：eleison は普通、小節 90 のように 3 音節 e-lei-son で作曲されています。ラテン語の二重母音は au, ae, ui, ei, eu, oe の 6 つですが詩の韻律では音節を分ける場合もあるといい、小節 92 は e-le-i-son と 4 音節にしています。曲の中での混在もあるのですね。でも逆に K.469 の方は 4 音節にはできない単語なのでここは持て余してしまっています。



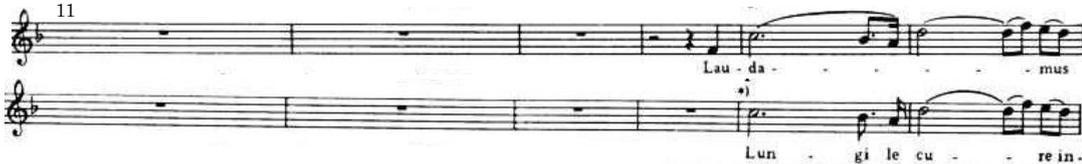
犬輔：第 2 曲はグローリアの替え歌です。**Glo-ri-a** は **glo** にアクセントがあり、**Can-ti-a-m(o)** は **a** にアクセントがあるという違いがリズムの変化を必要としたのでしょう。



鳥代：K427 の文字数が多い部分では短い音符をたくさん配置していましたが、K.469 でそこは文字数が少ないため同音の音符を集約して長い音符に変えています。これは K.469 にとってはお誂え向きに準備されていたと言えるほどぴったり納まっており、作曲の順序が逆だったのではないかと錯覚するほどです。



犬輔：第 3 曲はソプラノのアリアです。**Lau-da-mus** が **Lun-gi** になるため、弱起の 1 音節分の音符が削除されました。

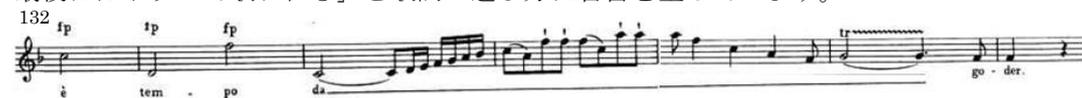


教授：ホルは「モーツァルトが明らかに反対せず、二次資料でも修正されていないのは、このアリアの小節 15 の弱拍がなくなったことであり、ここは厳密に言えば、冒頭のリトルネットのメロディーの正確な繰り返しは提示される場所である。このような不規則性は、関係する矛盾 [アクセントのことであろう] から生じるが、演奏においては、テキストの冒頭に **Deh! Oh! Si!** などの感嘆符を付けることで、おそらく均衡が保たれ、再び **Laudamus te** (4 分音符の上拍) のオリジナルの旋律パターンが可能になる」と代案を示している。

鳥代：小節 68 と小節 70 の四分音符+四分休符が八分音符 2 つ+四分音符に変更されています。音節が 1 つ多くなったからですが、モーツァルトは並行しているオーボエパートは変更していないとのことです (新全集ではオーボエパートも変更しておいたとのこと)。小節 71 も音符が一つ増えていますね。



犬輔：終結部のコロラトゥーラの箇所についてコーリ・エリソン^{注10}は「[K.469 では] 前置詞 **da** が厚かましくも 4 小節にわたって [小節 134-137]、まず高声を伴うメリスマで、そして最後にはトリルで歌われる」と歌詞の選び方に苦言を呈しています。



鳥代：モーツァルトを擁護するわけではないけれど、その **da** はマッテイのオリジナルでは **di** だったのよ。**di** だと「楽しみるとき」だけれど、**essere da** + [不定詞] は「…すべきである」ゆえ、「楽しむべきとき」と強調された表現になります。それだけでなく、**i** 音を伸ばすより、**a** 音を伸ばす方がコロラトゥーラとして適切だということもあるでしょう。前置詞であっても別の単語を選ぶという可能な限りの工夫をしているのだわ。

犬輔：第 4 曲の合唱でも K.469 で K427 より文字数が少ないため同音の短い音符を集約して長い音符に変えています。

鳥代：第 5 曲の二重唱および第 7 曲の合唱は無理なく替え歌にされていると思います。なお第 6 曲のテノールアリアと第 8 曲のソプラノアリアは新曲なので比較の対象にはなりません。

犬輔：第 9 曲の三重唱に関し、コーリ・エリソンは「重要でない冠詞 Le が強拍で始まって 1 小節続き [小節 107]、3 人の独唱者全員によって高音域で歌われる」と批判しています。

鳥代：この部分に関しては私も異議があります。歌詞は *Tutte le mie speranze* (私のすべての希望) というところで、英語にすれば *all my hope* であって *my* の前に *the* は入りませんが、イタリア語の言い回しでは冠詞 *le* が入るのです。しかし、*Le mie speranze* という形で歌詞が始まるのは奇妙です。鳥代がましいですが小節 107 の全音符を 3 つの音符に戻し、タイなしで各音符に *Tut-te le* を配すればよかったのと思うのです。

犬輔：このすぐ後に続く小節 118 以降は K.469 の方に多くの歌詞があり、K.427 のメリスマ音型を一切変形させずに歌詞を乗せて辻褃を合わせているのはさすがだと思います。

鳥代：第 10 曲の合唱では K.469 が K.427 より文字数が多いため全音符を短い音符に分割して歌詞を当てはめています。

教授：コーリ・エリソンは「全体的な効果としては、偉大な踊り手が体に合っていないお下がりの服を着て、優雅に跳躍するさまを見ているようである」と言うが、それほど替え歌が似合っていないということではなかったね。

6. まとめ

鳥代：ミサ曲をカンタータに作り直すことで、モーツァルトは 2 つの目標を達成したとホルはいいます。「1 つ目は、作曲に多くの労力を費やすことなく、大規模な合唱曲を制作できたこと、2 つ目は、この方法でのみ可能となる、未完成の楽曲の救済である。後者は、彼にとって確かに重要な問題であった。なぜなら、完成したミサ曲でさえ、ヨーゼフ 2 世の治世下のウィーンではごく少数の教会でのみ、特別な機会にのみ許可されていたからである」。

犬輔：マッテイの『聖書の詩篇集』がオリジナルだと分かりましたが、そこから詩篇をピックアップし、一部に変更を加えたのはモーツァルト自身なのか、あるいはやはりダ・ポンテが絡んでいたのかという問いかけが現在でもなされています。ぼくは音楽的な見地からの工夫があちこちに盛り込まれていることからモーツァルトが単独で詩篇を選択したのだと思います。

教授：バッハやヘンデルにおけるパロディはジャンルの一つとなっているといっても過言ではないくらいの重要な作品群である、それに引き換えモーツァルトにおけるコントラファクトール（替え歌）は等閑視されがちだ。歌詞の作者が判明したこの機会に、日本でも K.469 の評価が高められることを期待する。

注 1：Holl, Monika (1987). NMA I/4/3: Davide penitente, Notenedition ∞

注 2：エリソン、コーリ (2006). 井手紀久子訳、「K.469 カンタータ《悔悟するダヴィデ》」。ニール・ザスロー/ウイリアム・カウデリー編・森泰彦監訳/安田和信監訳補助『モーツァルト全作品事典』51-52 頁所収。

注 3：他の注記がない場合は Holl (1987) による。

注 4：他の注記がない場合は Brandenburg, Irene (2010). „Neues zum Text von Mozarts Davide Penitente KV 469“, in: Klang-Quellen, Festschrift für Ernst Hintermaier zum 65. Geburtstag, hrsg. von Lars E. Laubhold und Gerhard Walterskirchen, München 2010, S. 209-229 および、Brandenburg, Irene (2011). „Mozart, Davide penitente, and Saverio Mattei“ in: Newsletter of the Mozart Society of America Volume XV, Number 2 27 August 2011 ∞ による。

注 5：詩篇の邦訳は日本聖書協会 (1987) ∞ を参照した。画像は Google books からダウンロードした。

注 6：Wikipedia 詩篇 ∞

注 7：新宿シャローム教会サイト ∞ 他を参照した。

注 8：カンタータである理由は Holl (1987) によれば「テキストには認識できる劇的構成がなく、したがってレチタティーヴォもない。ソリストに役割が割り当てられていないからである。さらに、この作品はオラトリオとしては短すぎる」ということである。

注 9：木村佐千子 (2005). 「J. S. バッハのカンタータにおけるパロディ技法について」獨協大学ドイツ学研究 (54), 1-23 所収 ∞

注 10：前掲エリソン (2006)

(作成：2025 年 1 月 26 日、改訂：2025 年 1 月 27 日)